劇団 kocho　「箱の中」～運気は下るよ、どこまでも～

kocho さん。

と、言うより、これは、作詞・脚本・演出・俳優の桜さがみ様への、初めてのお手紙となるのでしょう。「劇評」という体裁のものではありません。お許し下さい。とにかく、これは、小生の知り得ない世界を覗かせて戴いた「舞台」だったから、いまも、面食らっているのです。

何年か前、私はあなた方の作品、きっず kocho さんへの批評を書きました。手元にそれが残っておりませんので、何を、どう書いたかも思い出せませんが、何か、神様がたくさん出てきて、ギリシャの神様m、アマテラスも、七福神も、とにかく世界中の神という神さまが現れて我が国の子どもに絡むのですが、一人だけ人間の子が居て、・・・というか、その幻影の世界に入り込めないで立ち止まってしまった少女が一人、その「神様」に立ち向かっていたように思います。提出した「感想評」ではただ一言。「神様は偉い人です。でもその『神様』を創ったのは人間です。それを忘れないでね」と書いたことだけを覚えています。その「評」を読んでくれていて、今回はどんな「劇」を見せてくれるのかな？と、そこを観たいと期待していたのでした。で。やはりその時も、的外れの批評だったのでしょうね。

さて、今回も戸惑っています。

♪　運気は下がる～よ、ど～こまでも～、とあって『運気』というコトバが出てきました。これは漢方の先生方がよく使われる言コトバですね。

―自然との巡り合わせ、短く言えば「運命」。天地・人体の変化が、人間の脈の中に現れるもの、として重く扱っている漢方のコトバです。

それが、この出演者・俳優たちの上に重くのしかかり、持ちこたえるのが大変、大変、と言っておられるんですね。

題名が「箱の中」。箱の中には様々な物が入っていますが、みなさんが全部、自分自身もその箱の中に閉じ込められていて、脈が鬱血している事は解りました。人質、だとか、犯人だとか、侵入者だとか。そんなコトバが大好きで、悶え苦しみながら、じゃれあって、騒ぎ廻って居たくって、という年代の女の子の・・・あれ？　男の俳優さんは出て来たっけ？　居なかったよな。男は「坂本龍馬の抱いた夢」だけだったんだ。男は一人も出ていなかったなあ。なぜ？

荒木昭夫（京都児童青少年演劇協会）